

---

# 自分が思っていることは相手も思っている

御園生 久秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自分が思っていることは相手も思っている

### 【Nコード】

N3911S

### 【作者名】

御園生 久秀

### 【あらすじ】

夫婦二人が夫の定年退職日記念にレストランで食事することになった。しかし、妻はあまり乗り気ではなかった……

(前書き)

人によってはかなり不快になる話だと思います。それでもお付き合い合っていてくれる方は読んでください。

35年ぶりにこのレストランに食事することになった。それから私達の生活が始まった。灯されてるロウソクを見ながら私は食前酒を飲んだ。

溶けていくロウソクを見ながら今までの生活を思い出す。夫に出会いから思い出まで……出会った頃は頼りない印象だったけど、それは間違いだった。夫は決断が遅く、なかなか動かないため頼りないと見えたが、実際はタイミングを見計らって大切な時に動くからそう見えていただけだった。決断さえすれば後はわき目を振らずに突き進み、それは仕事もそうだった。そのおかげで仕事ばかりで中々帰ってこなかったことが多かった。特に会社での出世競争では家に帰ることはなかったがそれでもその頑張りがかつこよくあごかれていた。

しかし、出世競争に敗れた夫は段々と覇気がなくなり、家でごろごろしていることが多くなった。家事も手伝わずに寝てばかり。ワイシャツもよれよれの物を着るようになり、それに耐えられない私は口うるさく正すように言ったがその声もむなしくその言葉が余計にケンカが増えるようになった。何回か離婚を考えたが女一人で子供を二人を育てるのが難しいと諦めた。

それから会話が減り、子供が独立する頃にはただの同居人みたいになった。正直、子供も手が離れて何もしない夫といくらいなら離婚しようかなと思っていた。そんな時だった。夫の携帯を見たのは。

夫が風呂に入っているとき、居間にある携帯が目についた。いつもは自分の部屋に置かれているが、今に置かれているのは珍しかった。何気なくそれを取り、メールを見るとそこには女からのメールで明らかに仕事に関係ないメールだった。

そのメール相手の過去のメールを読んでいく。そこには夫がメー

ル相手に口説く言葉があり、しかも向こうはまんざらではなく、文章から見て相手は若い女だった。

もう夫は自分の事を愛していない。お互い、愛していないなら夫を捨てることを決断した。けれど不満だらけの夫だが一つだけ誇れるものがあつた。

それは定年退職するまで会社を勤めあげたことだ。今の不況の時代にリストラもされずに40年間、会社を勤めあげ、毎日、休まずに会社に行った。それなりに優秀じゃなければとうの昔にクビにされているだろう。レストランに来たのも今日が夫の定年退職の日、こうやって食事にするのは定年退職の祝いかねてプロポーズされたレストランで食事をしていた。

ロウソクが半分溶けている。もう30分経つたのが分かった。ロウソクが消えればこの店を出れる。夫といえるのは後30分の我慢か……けれど30分もいるのに何も話さないのはおかしい話だ。何か話題を考えたが特に思いつかなかった。もう何年も口をきいていない。今、どんな仕事をしているのかすらわからない。

まあ、興味がなかったから……なくしたから仕方ない。昔のことがよさはない。そりや世間から見れば夫は悪くない方だろう。背もまあまああるしスリム。髪は白髪があるもののちゃんと整えている。スーツも……今日ばかりはちゃんと綺麗にしていた。もしデブではげだったら別居だ。汗かきだったら離婚していただろう。

そういう点では評価できるだろう。まあ、今日、離婚するのだから評価しても仕方ないんだけど。

もう一度、ロウソクを見る。残り……20分。そろそろ頃合いだ。「ねえ、あなた。大事な話があるんだけどいいかしら」

そう言い、私はバックにある離婚届を出そうとする……すると夫はそれに待ったをかけ、口を開く。

「ああ、その前に私の話しを聞いてもらえないだろうか？」

低い声で夫は言う。どうせ、今日で会わなくなるのだから最後の言葉くらい聞いてあげましょう。

「何かしら？」

「これなんだが……」

そう言っただけで夫は会社用のカバンを取り出し、B4サイズの封筒を取り出す。封筒には夫の会社名が書いてあった。会社に何か提出するのかしら？ 面倒そうだけど最後までいわがまを聞いてもいいか。そう思いながら封筒の中身を見る……が、その中身に怒りをこみ上げた。

「どうということよ。これ」

店全体が響くくらい怒っていたのが自分でも分かった。その姿、従業員が様子を見に来たが、夫はなんでもないと手を振り、追い返す。夫は少し落ち着くように言うが私は落ち着けなかった。

「これはどういう事。なんであなたが離婚届を渡すの？ しかもあなたのところにはもう判が押されているし」

夫は黙って私を見据え、ワインを口にする。こうなっているのが分かっていたと顔が語っていた。

「そのまま意味だよ。君と別れたい。だから判を押してもらえないだろうか。もちろん、こちらから離婚を言ったんだ。慰謝料を多く払うよ」

「言っている意味が分からないわ。なんであなたなんか捨てられないといけないのよ。説明しなさいよ。私が納得できるようなちゃんとした理由を」

夫は押し黙り、少し思案したあと、口を開く。

「好きな人ができた。君と別れて結婚しようと思う」

「結婚？ どうせ私と同じくらいのおばさんでしょ。何がいいのよ。意味が分からないは」

「いや、相手は大学生だ。今年20になったばかりの……」

「大学生……馬鹿じゃないの。大学生が65のじじいを相手するわけないじゃない」

すると夫はカバンからも一枚封筒を取り出し、そこから一枚の書類を私に見せた。

「これは婚姻届。しかもあなたの名前に相手の名前がある……もしかして本当なの。それこそバカよ。そんな結婚。金目当てに決まっているじゃない。それともそんなことすら分らないくらいボケているの」

「ボケてないさ。それに金目当ての結婚だというのは自分でも分かっているさ。けれど私はそんなことを気にしないさ。お金で幸せと優しさを買えるなら安いものさ」

「幸せと優しさを買える？ どういう意味よ」

私の言葉に夫は遠い物を見るような目をする。それから口を開く。「そのままの意味だよ。お金があれば彼女は優しくしてくれる。彼女と一緒にいれば昔の自分に戻った気分になれて楽しいんだ。昔の君は優しくかったが……今は優しくなくなった。残りの人生、お金で幸せを買うつもりさ」

「そんな嘘の優しさに何の意味があるの」

「心が安らげる。それだけで充分さ。それに君はもう私を愛していないだろ」

「どうしてそう思うのよ」

「君が私の浮気をしているのに気づいていただろ。なのに何も言っでこなかった。言わないということはもう私の事に関心が無い。無関心と言うことだ。嫌いな存在に人間は嫌悪感が無関心のどちらかだ。何も言わない君の心にもう私がいけないのだろ」

「……」

その言葉に私は黙ってしまった。夫はそのまま口を開き続ける。

「実を言うと、一度、君を試していたんだ」

「試す。何を……」

「一度だけ、私の携帯を居間に置いたことがあっただろ？ あれはわざとだったんだ」

「わざと？」

「まだ、自分に関心あるなら何かしら言ってくれと思うってわざと携帯を置いたんだ。君が携帯のメールを見ていたのは知っている。」

けれど、何も言わないということには関心がないのだから。仮に君が携帯を見なかったとしても、長い間、話さない夫を知ろうとしない事はやっぱり興味がない証拠だ。残りの人生。何もない人生を送るくらいならお金を払いながらも嘘の優しさを味わうつもりさ」

「私が離婚しないと云ったらどうするつもりよ」

夫は悲しそうな目で私を見る。うつとしい。なんでそんな目で見るとよ。第一捨てるのは私よ。なんで私が捨てられなくちゃいけないのよ。そういう言おうとすると夫は席を立つ。

「実を言つと、今、外で彼女を待たせているんだ」

「あなた、本気なの？」

「本気だよ。もう自分の部屋の荷物はもうつめて近くのアパートに引っ越したんだ。そのアパートで彼女と暮らす事になっている」

言い終えた夫は残りわずかなロウソクの火に息を吹きかける。

「それじゃあ。今度は離婚手続きの時に会おう。出来ればロウソクが尽きる最後まで一緒に居たかったよ」

夫は踵を返し、一度も後ろを振り向かず、レストランを出ていた。捨てられたのは私。その事実が私は呆然とした。



(後書き)

よく夫に愛を感じないと職場に言う女性を見て書いた小説。その女性  
性は人の話しをあまり聞かずに自分が正しいと言う考えの理論をす  
る女性です。

まあ、ぶちやめますとあまり感じが良いとは思ってませんでした。  
悪口を人前で堂々言う人をあまり信用しません。念を押しますが、  
悪口を言う人が嫌いではなく、人前で言う人が嫌いなだけです。  
親しい人と愚痴や悪口を言うのはストレス解消になるので私も人の  
悪口は当たり前になります。最近だと石原都知事の当選ですね。ま  
あ、政治の話しになると面倒なのではぶきます。特に親しくない人  
との悪口をただ聞くのは個人的に苦痛で前の小説のあとがきに書き  
ましたが堂々と言う人間は当たり前人の悪さを取って色んな人に  
悪く伝えてると感じるので好きじゃないですね。言うなら隠せと  
思うんですよ。

まあ、それを題材に書いたんですが、自分でもなんでこういう小説  
ができたのか分からないですね(笑)けれどこういう形の幸せもあ  
りなんじゃないかと思ひ、ラストはつまらない終わり方になりました。  
た。終わり方がへたでごめんなさい。

でわ、また会いましょう。読んでいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3911s/>

---

自分が思っていることは相手も思っている

2011年4月11日11時10分発行